

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 14 日現在

機関番号：16301

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2015～2016

課題番号：15H06455

研究課題名(和文)近代日本のアジア主義形成に関する思想的・地域史的研究

研究課題名(英文)The Formation of Modern Japanese Asianism : focusing on Trade and Media in 1880s-1890s

研究代表者

中川 未来(Nakagawa, Mirai)

愛媛大学・法文学部・講師

研究者番号：60757631

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：アジア主義と呼ばれた地域秩序構想はいかに形成されたのか。1880-1890年代を対象とする本研究は、実業を通じてアジアと関わり、またはメディアを通じてアジア情報を発信した人びと(高須謙三・中川虎之助・青山好恵)のアジア経験に注目した。

結果、朝鮮貿易に携わった高須の事業は興亜論に基づいていたこと、日本のアジア進出に伴い中国貿易や石垣島・台湾での製糖業を展開した中川は保護主義を唱えていたこと、青山が朝鮮仁川で発行した日本語紙『朝鮮新報』は日本国内でも流通し朝鮮観形成に強く影響していたことが明らかとなった。このようなアジア経験が、アジアを想像し地域主義を構想する際の基礎となったのである。

研究成果の概要(英文)： How was Asianism formed in Modern Japan, especially in 1880s-1890s ? This Study focused on the three persons named Kenzo TAKASU, Toranosuke Nakagawa, Yoshie Aoyama. They engaged in trade between Japan and Korea or China, and sent information about Asia to Japan.

The Fruits of works are shown below : in the first place, the business of Kenzo Takasu, trade between Japan and Korea, based on the Idea called KOARON. Secondly, Toranosuke Nakagawa's business trade between Japan and China, and made Sugar in Taiwan, based on protectionism. Finally, a Japanese Newspaper CHOSEN-SHINPO which published in Korea by Yoshie Aoyama, was distributed not only in Korea but also in Japan, and it formed Korean image in Japan. Experiences like them formed the foundation of Asianism.

研究分野：日本史

キーワード：ナショナリズム アジア主義 アジア認識 アジア経験 国粋主義 高須謙三 中川虎之助 青山好恵

1. 研究開始当初の背景

(1) 画期としての1890年代

1890年代は、日本社会で暮らす人びとの対外認識を跡づける上で一つの画期となる。アジア地域への旅券発給数を統計より確認すると、1890年代には清・朝鮮のみならず東南アジア、南洋諸島、豪州、インドへと目的地が爆発的に広がっている。

一方で坂野潤治『明治・思想の実像』(1977年)や大澤博明「天津条約体制形成と崩壊」(1991年)、伊藤之雄「日清戦前の中国・朝鮮認識の形成と外交論」(1994年)、平石直昭「近代日本の国際秩序観と「アジア主義」」(1998年)など従来の対外観研究は、当該時期を1880年代と1900年代の狭間期として扱っている。壬午事変(1882年)・甲申政変(1884年)など朝鮮問題や、世紀転換期における帝国主義状況の本格化といった諸契機が重視されてきたからである。

しかし人びとの「アジア経験」が増大している事実注目するならば、むしろ1890年代における対外観の変容にこそ注意を向ける必要があると考える。

(2) 「健康なナショナリズム」批判

研究代表者は、これまで1880末から90年代の国粹主義運動を研究してきた。国粹主義は、「国粹」すなわち自己認識をめぐる諸問題を思想課題としていた。それでは研究史で他者認識＝アジア認識はどのように論じられてきたのか。中野目徹『政教社の研究』(1993年)や松田宏一郎『陸羯南』(2008年)、有山輝雄『陸羯南』(2008年)、朴羊信『陸羯南』(2008年)といった諸研究は、政教社や陸羯南の主張を一括して「健康なナショナリズム」と措定した丸山眞男「陸羯南」(1947年)以来の研究動向を批判し、ナショナリズムの理念型からの遠近ではなく、個別具体的な思想生成の過程を重視する。

他方で民族ナショナリズムへの肯定的評価に基づく丸山眞男の国粹主義理解を継承した鹿野政直『資本主義形成期の秩序意識』(1969年)は、民族間の連帯を意識することで国粹主義の世界認識を統一的に把握する視座(＝弱者へのまなざし)を獲得し得た。対して近年の研究は、国粹主義に共通する世界認識の全体構造を見失ってしまったと思われる。しかし古田元夫『アジアのナショナリズム』(1996年)が指摘するように、民族ナショナリズムを評価基準とすることは最早不可能である。「健康なナショナリズム」批判を止揚し、国粹主義思想におけるアジア・世界認識枠組みを捉え直すための新たな視座が求められているのである。

2. 研究の目的

(1) アプローチ

そこで本研究では、山室信一『思想課題としてのアジア』(2001年)や松浦正孝編『アジア主義は何を語るのか』(2013年)が提起

した、「思想連鎖」や日本とアジアを結ぶネットワークという視点に注目する。思想の相互連関性・地域越境性を重視する山室らのトランスナショナルな研究手法を学びつつ、地域に存在したアジアとの関係に目を凝らし、そこに見出される思想連鎖の諸相を明らかにする作業を積み重ねることで、ナショナリズムとアジア認識の関係を考察することが本研究の目的となる。

(2) アジア・イメージの形成

「アジア」という空間概念は所与のものではなく、時々の歴史的諸条件により選択的に作為される。そのため本研究は頂点思想家により形象化されたナショナリズムの思想や「アジア」概念が、個々の地域や人びとの具体的な活動のなかでどのように肉化し(または拒絶され)再獲得されるのかを分析したい。

そこで地域実業家層の活動に目を向け、1880年代の大阪で朝鮮貿易に携わった高須謙三(大阪協同商会)と、1890年代に徳島・八重山・台湾で製糖業を営んだ中川虎之助を取り上げ、アジア地域と密接に結びついた彼らの活動の軌跡とその内容を、確実な史料に基づき分析することで、「アジア」イメージが如何に立ち上がるのかを明らかにする。

(3) アジア体験からアジア経験へ

さらに本研究は個々のジャーナリストや社会集団の「体験」に注目し、それらが形象化され流通する過程を、長期的なスパンで掘り下げることで、「アジア体験」が他者にも受容可能な「経験」となる経路を検証する。

取り上げるのは、現愛媛県宇和島市出身のジャーナリスト・青山好恵である。青山は最初期の在朝鮮ジャーナリストであり、その報道活動は、1890年代以降の朝鮮認識に大きく影響した。彼の「体験」を掘り起こし、メディアを通じてその体験が地域社会、そして近代日本においてどのように受容されるのか、その過程を微細に浮かび上がらせる。

3. 研究の方法

(1) 1880年代における大阪資本の朝鮮進出と興亜論

1880年代は福沢諭吉の朝鮮開化派支援に象徴されるように、朝鮮近代化をめぐる日朝間の相互交流が増大した時期であった。対朝鮮輸出額は1883年に日清戦前のピークを記録する。

そこで本研究では、朝鮮近代化を教導する試みと実業界の関係を明らかにする。具体的には、大阪財界の後援により対外問題研究団体「興亜会」が設立した「興亜大阪第二分会」の活動、そして興亜会員の高須謙三による対朝鮮事業(大阪協同商会)を明らかにすることで、1880年代の「朝鮮経験」が90年代以降のアジア認識形成にいかん作用するのかを検討する。

(2) 製糖業者中川虎之助の地域振興論とナショナリズム

中川虎之助(1859~1926)は、徳島県出身の製糖業者・衆議院議員である。中川は、輸入糖により在来製糖業が打撃を受けるなか、八重山ついで台湾に進出することで活路を見出そうとした。

洋糖による阿波製糖業者の圧迫が沖縄開拓論から直輸入論へ、そして八重山開拓から台湾進出へと向かった中川の軌跡を検証し、地域振興とアジア進出の交差点に浮かび上がるナショナリズムを検出したい。徳島県立博物館・文書館・図書館に所蔵の関係資料や新聞を調査し、さらに台南中川製糖所時代(1901~1906)については台湾国史館台湾文献館所蔵の「台湾総督府公文類纂」など台湾に残る史料も積極的に利用する。

(3) 『朝鮮新報』主筆青山好恵の朝鮮報道

青山好恵(1872~1896)は日清戦争前後の朝鮮において『大阪朝日新聞』通信員や仁川居留地で刊行された日本語紙『朝鮮新報』の経営者として朝鮮報道に携わった。

居留地メディアの発信した情報が日本国内に環流し朝鮮観形成に与えた影響を、ジャーナリスト個人の具体的な足跡に即して解析するため、本研究では国立国会図書館や朝日新聞社社史編修センター(大阪)、明治新聞雑誌文庫などに所蔵の史料を調査・収集するとともに、愛媛大学に勤務する地の利を生かし、愛媛県立図書館所蔵の『海南新聞』『宇和島新聞』など地域紙の調査や現地調査を通じて、青山の行動と言説を詳細に跡づける。

4. 研究成果

(1) 1880年代における大阪資本の朝鮮進出と興亜論

本研究では大阪資本の朝鮮進出と興亜論の経済構想との具体的関係を明らかにするために、朝鮮貿易開始直後の大倉喜八郎(大倉組商会)の動向から朝鮮貿易に対する実業家および日本政府の認識を確認し、次いで五代友厚、大阪商法会議所、大阪興亜第二分会(興亜会大阪支部)を事例に大阪実業界のアジア貿易論を直輸出構想との関連で検討したうえで、大阪協同商会なる貿易商社(社長高須謙三)の朝鮮貿易事業と朝鮮開化派官僚の関わりを検証した。

用いた史料は、「松方正義関係文書」「大隈重信関係資料」「大隈重信関係文書」「花房義質関係文書」「五代友厚伝記資料」「河野広中文書」「杉田定一関係文書」といった私文書類、「太政類典」「公文録」「公文類纂」「外務省記録」「防衛省防衛研究所所蔵史料」など公文書類、『興亜会報告』『大阪新報』『朝日新聞』『朝鮮新報』『海南新聞』といった新聞雑誌史料、また「修信使記録」「朝土視察団関係資料」など朝鮮側の史料である。

については1876~7年に着手された大倉喜八郎の朝鮮貿易に対して政府・大蔵省は

消極的姿勢をとっていたこと、その背景には朝鮮貿易に対する期待度の低さがあったこと、しかし大倉は当該期の輸出入の不均衡を是正するためにも「亜細亞洲」に注目しており、さらには商活動を通じてアジア諸国と「互ニ交通親睦」することで欧米と対峙するというアジア主義的構想を抱いていたことが明らかになった。大倉のアジア貿易構想において朝鮮は日本と中国を結ぶ交易ネットワークのなかに組み込まれており、直輸出振興を目指す大倉の朝鮮貿易構想は、日本が主導するアジア地域間交通網形成という展望と明確に結びついていたのである。

については、1880年に結成された大阪興亜第二分会が五代友厚・大阪商法会議所を中心とする大阪実業界の後援を受けており、大阪実業界のアジア地域への直輸出構想の一環にあったことを明らかにした。彼らの視野には「支那地方」のみならず朝鮮への進出も入っており、それは大阪商法会議所書記天野皎を釜山商法会議所へ派遣し、釜山商法会議所を大阪商法会議所の「出張」とする構想によく示されている。

については、前述した大阪実業界の朝鮮進出を具体的に担った高須謙三(興亜第二分会員)と彼が率いた大阪協同商会の具体的活動を明らかにした。1878年に設立され朝鮮貿易を行った大阪協同商会の事業構想は、大倉喜八郎と同様に日本と朝鮮そして上海・香港市場を接続する貿易網構築を射程に入れていた。同商会は元長州藩士である社長高須の人脈を生かし大阪砲兵工廠が製産した機械類を朝鮮へ輸出していた。

高須謙三と大阪協同商会は、1876~1883年に派遣された朝鮮政府の日本視察団に経費の融資や宿泊斡旋、饗応、物品の購入仲介など種々の便宜を図っていたが、その背景には使節団参加者を中心に形成される朝鮮開化派官僚とのコネクション形成、そして経済的利益の確保という目標が存在した。高須は、商業を通じて「未開」たる朝鮮を「開導」しその購買力を増やすことが経済的利益ひいては「国益」につながると認識していた。実際使節団への便宜供与の見返りとしては船舶や機械類といった朝鮮「開化」に必要な物品の受注が見込まれていたのである。

事業面でみるならば1880年代に企図された以上の朝鮮貿易構想は1884年の甲申政変と翌年の天津条約締結により決定的となった朝鮮半島に対する清の影響力強化により不成功裡に終わる。このような東アジア国際政治の環境変化は、福沢諭吉「脱亜論」(1885年)の執筆動機となったが、本研究が明らかにしたように興亜論の経済的側面に着目し、その射程を1890年代にまで伸ばすならば、「興亜」は必ずしも「脱亜」に転換したわけではなく、むしろ興亜論の持続性が浮かび上がってくる。1880年代大阪実業界の朝鮮進出は朝鮮浪人と呼ばれた政治青年の朝鮮渡航を促し、日清戦争期に彼らは日本主導によ

る朝鮮「開化」を後押しする民間の主体として活動することになるのである。

(2) 製糖業者中川虎之助の地域振興論とナショナリズム

本研究では、従来明らかではなかった中川虎之助の軌跡を検証する前提として、中川の地元徳島における史料収集、台南製糖所の置かれた台湾における史料収集を行った。

なお中川虎之助の個人史料群(中川家文書)は御子孫が所有し、徳島県文書館が調査を行った際に撮影した画像データと目録が同文書館に所蔵されている。本研究では当初同史料群を用いる予定であったが、徳島県文書館では同史料を現在一般には公開していない。本研究による調査では同館の御好意により目録閲覧・同館内でのデータ閲覧を許可されたが、研究成果の公表には史料所蔵者の許可が必要となる。そのため本報告書では上述については徳島県立図書館所蔵史料や公文書類を中心に触れるに留める。後述のように本研究主題は更に発展する可能性が高いため、主な成果の公表は今後に期したい。

本研究で用いた史料は上述中川家文書のほか「剣岳中川虎之助年譜」などの私文書類、「外務省記録」、「台湾総督府公文類纂」や「台湾総督府図書館所蔵史料」などの公文書類、『普通新聞』『徳島日日新聞』『台湾日日新報』など新聞史料類である。

については、中川虎之助に関する基本的な先行研究である佐藤正志「中川虎之助と糖業政策論」(徳島地方史研究会『史窓』第12号、1982年)の記述で触れられるところの少ない日清戦争前(八重山・台湾渡航以前)の活動を明らかにする点に注力した。その結果、1853年生の中川はまず家業である製糖業に従事し、第1回内国勸業博覧会(1881年)では製糖功労者として招聘され有功一等賞を受賞、また同年には北海道で甘蔗およびビート栽培の調査をおこなっていたことが明らかとなった。

次いで中川は1886年に貿易商社(大阪洋行)を設立する。同社は徳島や大阪より資本を集め、大阪に本社、台湾と厦門に支店を置き中川の弟惣三郎(慶應義塾出身)が厦門に駐在した。1888年に惣三郎が同地で客死したため同社の事業は途中で打ち切られたものの、砂糖や雑貨類を中国船ではなく日本船で運送(横浜・台湾打狗間)という同社の事業計画は、1880年代の直輸出構想のなかに位置づけられる。なお「中川家文書」には同社の貿易事業に関する史料も含まれている。

1889年に中川は外務省に対し「南清直航路」の開設を請願するが、このように糖業経営と貿易事業という一見かけ離れた中川の取り組みは、藍や砂糖という近世以来徳島地域の特産品であった生産物が、安価で高品質な海外製品の流入により圧迫される現状に対する強い危機感を背景としていた。1890年に徳島県の西板倶楽部で行われた中川の

演説内容からは、都市部と「田舎」の経済格差に関する認識や自由貿易に対する保護貿易擁護の主張が看取される。

外国製品に対抗して「内地生産者」の「実力元気」を養成するという中川の議論は国粹主義の実業論の主張と合致する。彼ら外国製品に圧迫される地域生産者が国粹主義運動の担い手であったこと自体はすでに指摘されているが、明確な史料により立証されてきたわけではない。本研究の過程で明らかとなってきた「瀬戸内地域の実業者によるアジア進出」という論点は、平成29年度採択の科研費(17K13532)若手研究B「近代日本の海洋進出とナショナリズム形成に関する思想的・地域史的研究」(愛媛県今治地域の漁業・貿易業者のロシア貿易・北洋漁業構想を主題とする)にも共通するため、本研究主題は継続して調査を進める予定である。

については、台湾総督府や臨時台湾糖務局による中川虎之助の事業への補助金支給や台南製糖所の営業成績に関する史料類を収集した。先述「中川家文書」には台湾時代の史料も数多く含まれているため、今後両者を統合することで不明な点の多い中川虎之助の台湾時代について展望を描きうると考える。1908年以降の中川は帝国議会衆議院議員として、特に糖業政策の立案・提言に深く関与するが、その基盤には日清戦争以前の製糖・貿易事業や八重山・台湾での事業がある。「中川家文書」中の政治家や官僚からの書簡群の解析を含め、1880~1890年代に形成された中川虎之助の実業経験に立脚して形成された思想(=ナショナリズム)が、政治的主張や政策立案活動を経由して社会に還流する過程の分析は今後の課題である。

(3) 『朝鮮新報』主筆青山好恵の朝鮮報道

本研究では、青山好恵が展開した報道活動の実態とその影響範囲を具体的に明らかにするため、青山の出身地宇和島の現地調査を含む史料収集により彼の履歴を可能な限り解明すること、そのうえで青山が日本語紙『朝鮮新報』や彼が通信員をつとめた『大阪朝日新聞』、郷里宇和島の『宇和島新聞』などの関係記事を網羅的に収集し、彼の朝鮮経験がどのような主張と結びついていたのか、また彼の発信情報が朝鮮観形成にどのように影響していたのかを分析した。なお本報告書では紙幅の都合上、日清戦争前の青山の活動を中心に記述する。

本研究で用いた主な史料は、『朝鮮新報』『東亞貿易新聞』『大阪朝日新聞』『宇和島新聞』『海南新聞』『鶴城青年』など新聞雑誌史料、「外務省記録」や『官報』など公文書類、「原敬関係文書」「河野広中文書」など私文書類、『仁川事情』『仁川府史』『北征録』など公刊史料類である。

については、まず朝鮮渡航以前の青山好恵の履歴を明らかにした。1872年、青山好恵は宇和島県笹町に、元宇和島藩士村松嘉久

造の3男として生まれた。

父嘉久造の死去により生家は経済的に没落しており、結局長兄恒一郎は学資が絶え廃学、次兄豊次郎は『関西西報』等を経てようやく日本法律学校へ入学する。青山の場合、1886年に上京を果たしたものの校僕や食客として苦学し、その後京阪間を流浪したと伝わるのみで、具体的な経歴は不明である。結局病を得た彼が宇和島への帰郷を余儀なくされたのは、1890年の初頭と推定される。

長兄恒一郎と次兄豊次郎の出郷にあたり糸口となったのは、同郷の末広重恭との繋がりである。笹町の村松家は末広家の東隣に位置しており、豊次郎は鉄腸の養父である末広静が主宰する家塾静古園に通ったという。恒一郎と豊次郎が大阪で刊行された大同倶楽部系『関西西報』に相次いで関与したのは、末広との関係によると考えられる。事実、恒一郎は鉄腸の『国会』主筆就任とともに1890年7月には『国会』へ異動している。

一方で自余の兄弟は1890年当時、郷里宇和島にあって末広鉄腸率いる大同倶楽部の組織固めに従事していた。1890年4月9日に鉄腸が宇和島港へ到着した際には、宇和島青年会など同地における大同派青年団体代表の一人として「大同団結万歳」などの大旗を押し立てて出迎える青山好恵の姿が報道されている。この宇和島青年会こそが、宇和島における青山の活動拠点である。

宇和島青年会は、1880年代末より全国各地に叢生した青年結社の典型的な一つであった。同会機関誌『鶴城青年』には海外雄飛を果たした「海外会員」による通信文が数多く掲載されていた。彼らは海外雄飛の先達として『鶴城青年』に頻々と書簡を寄せ、郷里の後輩に「世界」の現状を伝達していた。例えば「朝鮮京城不覚生」なる会員は「嗚呼北海道に、支那に、朝鮮に、皆是新日本の少年か興味の原野なり」と呼びかけている。

宇和島青年会に集った青年層の自己認識を確認すると、彼らは自らを「才学並ひ秀でたるの青年にして、資の給せざるが為に空しく怨を呑んで南海の僻隅に蟄居したる者」、もしくは「都ノ青年」と対比される「田舎青年」と位置づけていた。宇和島青年会員は中央での立身出世を阻まれているとの疎外感を核として結集しており、海外会員からの情報摂取を通じ、国家への寄与にも繋がる立身出世の道として「海外雄飛」を意欲している。朝鮮渡航後の青山好恵もまた『鶴城青年』へ頻りに寄稿するとともに、『朝鮮新報』を毎号同会へ送付していた。『鶴城青年』は、宇和島の青年層にとって重要な海外情報の窓口として存在していたのである。

同誌への寄稿中で青山は、自らを朝鮮の「探検者」と称している。このような「未開地」を「探検」という使命感は、政教社の雑誌『日本人』で「日本人の天職」として「亜細亞大陸の探検」を推奨していた内藤湖南の意識にも通底する。また海港を擁する宇

和島の青年層は、対外輸出と地域振興を結びつけて論じた稲垣満次郎の言論の受容者でもあったことが『鶴城青年』誌上から確認される。1890年代初頭の『日本人』やその後継誌『亜細亞』を賑わせたアジア論は、宇和島青年会など東京以外の地域に存在した青年結社に集う「田舎青年」たちの、立身出世意欲と結びついたアジア地域への関心によって支えられていたといえる。

については、『朝鮮新報』発行の経緯とその機能を明らかにした。青山好恵は1890年に朝鮮仁川の日本居留地へ渡り、同地の在留日本人で組織された仁川商業会議所の書記となった。青山の朝鮮渡航は、朝鮮在留愛媛県出身者ネットワークをたどったものと推測される。

『朝鮮新報』の前身紙『仁川京城隔週商報』は、1890年1月28日に「仁川京城ノ商況物価」「朝鮮ノ国勢民況」「各地方ノ雑報」を報道し「朝鮮ノ貿易及朝鮮ノ国勢上ニ光明ヲ得セシムルノ機関」として創刊された。創刊者を佐野誠之とする文献もあるが定かではない。同紙は1891年9月1日『朝鮮旬報』と改題し、第22号まで刊行されたが、翌92年4月15日に『朝鮮新報』として再発足する。青山は『朝鮮新報』改題時には主筆を務めていたようだが、史料的限界から具体的な関与がはじまった時期は明確にできない。

『仁川京城隔週商報』から『朝鮮旬報』『朝鮮新報』への矢継ぎ早の改組は、一つには仁川居留地の急速な経済規模拡大を背景とするが、いま一つの理由は、在留日本人が「朝鮮ノ時事ヲ故国ノ同胞ニ報道スルノ必要」を認めつつあった点に求められる。1892年当時、仁川や漢城で流通していた日本語メディアは、『大阪朝日新聞』を筆頭に『鎮西日報』『大阪毎日新聞』『長崎新報』などが主であったという。これら諸紙の朝鮮報道について青山は「殊更らに奇を好みて臆測極る」と批判的であり、朝鮮情報を正確に「本国に速報するの道」を確保することが課題とされていた。しかし、例え青山が「朝鮮時事ノ報道ニ至テハ自カラ天下独歩ナルヲ信ス」と自認していても、居留日本人のみを対象読者としていた情報発信の範囲には限界があろう。そのため青山は『大阪朝日新聞』通信員を兼務するとともに、『朝鮮新報』記事の内地メディアへの転載を積極的に歓迎していた。清商との競合状態にあった朝鮮在留日本人は国家権力による庇護を要求しており、居留地メディアは日本内地へ「朝鮮の事情を知らしめ」る役割を担うことで、彼らの意思や利害に関わる諸情報を政府や内地輿論へ伝達することが望まれていたのである。

なお『朝鮮新報』は在朝鮮日本人社会や日本本国のみならず、朝鮮や清国をはじめとする関係諸国でも参照されていた。また青山は『大阪朝日新聞』以外にも、長兄村松恒一郎が在籍した『国会』や郷里愛媛県の『海南新聞』『宇和島新聞』にも不定期に情報を提供

していた。青山を介した朝鮮情報の流通範囲が、大阪や東京のみならず直接地域社会にも及んでいたことは留意しておきたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

1. 中川未来、『朝鮮新報』主筆青山好恵の東学農民戦争報道：1890年代の朝鮮情報流通と居留地メディア』、『人文学報』(京都大学人文科学研究所)第109号、2017年、掲載決定、頁数未定、査読有

2. 中川未来、『香川新報』の東学農民戦争報道：地域からのまなざしをいかに捉えるか』、『愛媛大学法文学部論集人文学編』第43号、2017年、掲載決定、頁数未定、査読無

3. 中川未来、『一八八〇年代興亜論の経済構想と朝鮮：大阪資本の朝鮮進出を中心に』、『愛媛大学法文学部論集人文学編』第41号、2016年、13～31頁、査読無、機関レポジトリによる公開用URL：
<http://iyokan.lib.ehime-u.ac.jp/dspace/handle/iyokan/4939>

[学会発表](計6件)

1. 中川未来、『日清戦争期『香川新報』の甲午農民戦争報道』、京都大学人文科学研究所国際シンポジウム「日清戦争期の東アジア」、2016年10月15日、京都大学人文科学研究所(京都府・京都市)

2. 中川未来、『1890年代の海外情報流通と地域社会』、史録会2015年度例会、2016年3月21日、松山市民会館(愛媛県・松山市)

3. 中川未来、『「南洋」経験と「アジア主義」の形成』、京都大学 CIAS 共同研究 複合ユニット「宗教実践の時空間と地域」(第2回)・個別ユニット「仏教をめぐる日本と東南アジア地域 - 断絶と連鎖の総合的研究」(第4回)合同研究会、2016年2月20日、京都大学地域研究統合情報センター(京都府・京都市)

4. 中川未来、『1890年代の朝鮮情報流通と青山好恵』、近代史文庫12月例会、2015年12月20日、愛媛県生活文化センター(愛媛県・松山市)

5. 中川未来、『東学農民戦争報道と青山好恵：井上報告・朴報告へのコメントに代えて』、京都大学人文科学研究所国際シンポジウム「日清戦争と東学農民戦争」、2015年12月19日、京都大学人文科学研究所(京都府・京都市)

6. 中川未来、『朝鮮新報』主筆青山好恵と

1890年代の朝鮮情報流通』、京都大学人文科学研究所「近代天皇制と社会」班第33回研究会、2015年10月31日、京都大学人文科学研究所(京都府・京都市)

[図書](計1件)

1. 中川未来、『明治日本の国粹主義思想とアジア』、吉川弘文館、2016年、331頁

[その他](計6件)

講演・社会貢献等

1. 中川未来、『1890年代の愛媛と朝鮮』、日本コリア協会主催第14回3・1独立運動記念講演会、2016年3月1日、松山市男女共同参画推進センター(愛媛県・松山市)

2. 中川未来、『明治時代の海外報道と伊予の言論人』、気軽に文化講座 in 内子、2015年11月19日、内子自治センター(愛媛県・内子町)

商業紙・広報媒体等への掲載

3. 中川未来、『「外へ向けての」アジア主義から「緩やかな」アジア意識へ』、『図書新聞』第3280号、株式会社図書新聞、2016年11月26日

4. 中川未来、『末広鉄腸の思想水脈とアジアへのまなざし：門田正経と青山好恵をめぐる』、『小日本』第27号、松山市立坂の上の雲ミュージアム、2016年9月

5. 中川未来、『宇和島出身の『朝鮮新報』主筆・青山好恵について』、『愛媛資料ネット会報』第28号、愛媛資料ネット、2016年6月

6. 中川未来、『中川未来『明治日本の国粹主義思想とアジア』を語る』、東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク ASNET メールマガジン第586号、2016年4月

6. 研究組織

(1)研究代表者

中川 未来 (NAKAGAWA Mirai)

愛媛大学・法文学部・講師

研究者番号：60757631

(2)研究分担者 なし

(3)連携研究者 なし